

# 「日本語の文章表現」クラスにおける 多様な指導と実践の報告

和田綾子・藪崎淳子・横濱雄二  
米田明美・信時哲郎・西田隆政

## A Report of Various Approaches in “Japanese Literacy” Class

WADA Ayako, YABUZAKI Junko, YOKOHAMA Yuji,  
YONEDA Akemi, NOBUTOKI Tetsuro and NISHIDA Takamasa

**Abstract** : This paper reports various approaches used in our “Japanese literacy” class for the second-year university students who belong to Department of Japanese Language and Culture. We have found that few of our students have learned the basic skill of organizing their thoughts to write an essay in a logical, systematic way. Due to this, students find writing an essay very troublesome and time consuming. But does it have to be that way?

We made the class compulsory in our department from 2010 and each instructor has made their own curriculum for the course. One of the approaches is to make students aware that writing an essay is not only a way to deepen their communication skills, but also that, if they understand the standard guidelines of essay writing, then will become more confident in writing one and enjoy it, too.

By reviewing each instructor’s approach, we have found that the course has achieved a certain degree of success in increasing the student’s essay writing abilities. Also, we discuss how to improve it in the future.

**Key Words** : essay writing, curriculum, understanding the standard guidelines of essay writing, organizing the thoughts

**要旨** : 本稿では、日本語日本文化学科2年生を対象の「日本語の文章表現」における様々な実践について報告する。本学科のほとんどの学生は基礎的なスキルとしてのアカデミック・ライティングを体系的に学んできていない。そのため学生たちはレポートを書くことを苦役と感じている。しかし、レポートを書くことは本当に苦役だろうか。日本語日本文化学科では、2010年から「日本語の文章表現」を必修化し、それぞれの教員が様々な取り組みを続けてきた。その実践の中で、書くこととは、つまり自己との対話、他者との対話を深めることであるということに気づいてもらうと同時に、形式を理解すればレポートは書けるという実感を持たせることを目的としてきた。ここで改めてそれぞれの教員の実践を振り返ることにより、当初の目的が一定程度達成できたことを確認するとともに、今後の改善点について検討する。

**キーワード** : レポートの書き方, カリキュラム, 形式の理解, 思考の体系化

## I. はじめに

本報告は、日本語日本文化学科2年生前期の必修科目「日本語の文章表現」2016年度の実施内容を記録したものである。この科目は、学生が、「書く」ための基礎的な力を十分につけられないままレポートや卒業研究に取り組んでいる現実に対応する必要性から、2010年度に学科の専攻科目の中で必修化され、現在に至っている。各年度によって変動はあるが、おおよそ1クラス15人前後で6クラス編成とし、各担当者が、試行錯誤しながら指導にあたってきた。

学科の「日本語の文章表現」必修化の取り組みと並行して、学生の「書く」力養成への取り組みは、本学全体でも進められてきたと言えるだろう。全学共通科目の中に「キャリアのための日本語」「アカデミックスキルズ」「日本語リテラシー」等が設置され、より多くの学生が「日本語」のリテラシーをトレーニングする機会を得られるようになった。

しかし、それぞれの科目の連携も役割分担も議論されないまま、今日に至っている。大規模なライティング・センターを擁する早稲田大学の取り組み<sup>1)</sup>など、マンパワーを確保できる大規模大学の統一された取り組みと比べることはできないが、各担当教員の経験の蓄積を共有し、それぞれの授業改善につなげることには意味があろう。この報告では、「日本語の文章表現」の授業形式、シラバス及び、各クラスの授業スタイル・内容・どのような課題に取り組んできたかを各担当者が報告する。

## II. 授業形式

上述したように、「日本語の文章表現」は日本語日本文化学科2年生の前期必修科目である。学生は学生番号順に均等にA～Fクラスに振り分けられ、15人前後の少人数クラスで、シラバスに「授業のねらい」として記載されている「これからの大学生活に必要な日本語表現」「論理的な文章を作成する力」を身に付けるべく、15回の授業に取り組む。教員は共通シラバス（表1）をゆるやかに共有し、それが具体的にどのように運用されるかは、各担当者に任されている。教材も共通のものを指定しておらず、各担当者が適宜、使用している。

また、この科目が必修化された当初からの了解事項として、3回以上の文章作成の課題を出すこと、卒業研究にもつながる文章の書き方を指導するということの2点も、共通認識として共有されている。各担当者がこれら共通シラバスと共通了解事項を元に、各クラスのシラバスを作成し、指導にあたっている。

なお、この科目は日本語日本文化学科2年生にとっては、前期の専攻科目のうち、唯一の必修科目であるという性格上、「基礎ゼミ」的な性格も有している。そのため、「文章表現」に直接関わらない内容が、シラバスに組み込まれている。

たとえば、第1回目の授業時には、「ゼミ選考説明会」が、全クラス合同で行われる。これは、学生を卒業研究につながるゼミに振り分けるゼミ選考の方法について説明する会である。また、毎回の授業の冒頭10～15分程度、小テストを行っているが、これは、学生の基礎学力を向上させる目的で自習教材（SPIに関するもの）を課題として配布しており、その学習の進捗を確認するための小テスト（非言語問題のみ）として実施するものである。これらは、本来の授業内容である「文章表現」のために使える時間を圧迫する側面もあるが、学科の教員の間では、学生の学力の底上げと、就職活動への備えの必要性は共有されており、現行カリキュラムの中では、この方法が現在実行可能な取り組みの中で、最も合理的であると認識されている。

---

1) 佐渡島紗織／太田裕子編（2013）『文章チュータリングの理念と実践』ひつじ書房

表1 共通シラバス

第1回	ゼミ選考説明会	6クラス合同
第2回	情報検索講座 <sup>2)</sup>	2クラスごとに実施
第3回	文章表現1 文法と文体・わかりやすい文章	各クラス
第4回	文章表現2 悪文矯正	〃
第5回	文章表現3 文章作成の実際	〃
第6回	資料の解釈1 文章の要約	〃
第7回	特別講座 <sup>3)</sup>	6クラス合同
第8回	資料の解釈2 図表を読み解く	各クラス
第9回	レポート作成1 テーマの設定	〃
第10回	レポート作成2 問題点と仮説	〃
第11回	レポート作成3 文章構成	〃
第12回	レポート作成4 論文の書き方	〃
第13回	レポート作成5 形式と引用の処理	〃
第14回	社会人に向けて 就職ガイダンス <sup>4)</sup>	6クラス合同
第15回	まとめ	各クラス

### Ⅲ. 各担当者の取り組み

以下では、各クラスの取り組みを、A～Fクラスそれぞれの担当者が紹介する。

#### A クラス（担当者：和田綾子）

##### 1. コース・デザインとゴールの設定

「日本語の文章表現」が必修化されて以来、大学で課題として課されるレポートや、卒業研究を作成する際に、最低限必要なスキルを習得させるための科目としての役割を果たすべく、試行錯誤を繰り返してきた。

この科目を担当した当初から2014年度まで、学生の「書くこと」に対する意識と、ライティング経験を知るために、書くことに苦手意識があるか、「よい文章」とはどんな文章か、今までに文章を書くことについての指導を受けたことがあるか、それまでに大学で課されてきたレポートにはどんなものがあったかについてアンケートを取ってきた。その結果、圧倒的多数の学生が「書くこと」に「苦手」意識を持っていること、「わかりやすい」文章がいい文章だが、「わかりやすさ」の条件を具体的には理解していないこと、与えられたテーマについて調べてまとめるタイプのレポート（学生には本を読んでまとめる「要約」として認識されている）や、意見を述べるタイプのレポートが多いことが分かった（実は意見を述べるタイプのレポートは、自分の論点を明確にするために問題提起をして論じるタイプのレポートであるが、学生には「感想」を述べるレポートとして意識されている）。

また、学生自身に自分の日々のライティング経験を振り返ってもらうための簡単なアンケートを毎年実施している。こちらのアンケートからは、学生はブログやホームページ、授業に関する資料以外はほとんど読んでいないこと、小説を読む学生は散見されるが、「論じる」タイプの読み物はほとんど読んでいないことが分かった。また、メールやLINE以外にはほとんど「書く」ことがなく、わかりやすさのために、伝達内容の「構成」を考えなければならないということへの意識もほとんどないことがわかった。

これらのレディネス調査を踏まえて、次の5点を学生に意識化させることを、全体的なゴールとして設定する

2) 図書館職員による情報検索講座2クラス合同で2～4回授業時に1回ずつ実施。

3) 特別講座は全クラス合同で外部講師を招いて開かれる。学科の学びに関連したテーマ、将来の働き方を意識させるようなテーマが毎回選ばれている。

4) 就職活動への取り組みを意識化させるために、4年生の就職活動経験談などを聞く会を開いている。

ことにした。

①自律的な書き手になること

→自分が書いたものに対して推敲・検討・評価ができるようになることを意識する。

②書くためには、思考を耕すのが大事であること

→議論・ブレインストーミングを「書く」ことの過程に含める。実際に「書く」という作業を通して、自分の認識や思考を深め、考えを明確にしていこうとする態度を身につけることを目的とする。

③問題を立て（問題提起）、論点を明確化すること

→「感想文」「要約文」ではないタイプのレポートの型を理解する。

④意見には必ず自分の論拠と異なる視点からの検証を入れること

→「独りよがり」ではないと読み手に納得させることの必要性を理解する。

⑤構成とその一貫性を意識すること

→【問題提起→仮説を立てる→検証する】という序論から結論につながる構成を意識するとともに、論理の一貫性を意識する。

2. 使用する教材、指導法の工夫

授業実施時の学生へのアプローチの仕方として気を付けたのは、レポートを書くために必要な一つ一つの項目をスモール・ステップで練習させること、また、モデル・具体例（よい例、悪い例）を具体的に示すことである。これは、「書くこと」に慣れていない学生を意識してのことである。また、学期末のレポートでは形式、作成方法、評価のポイントを明確にすることにより、ステップを踏んで、条件を満たせばレポートは書けるようになるという実感を持たせ、「苦手意識」を払拭することも意識した。また、書いたものについては教員による添削・評価だけではなく、書き手自身、またピアによる添削・評価も取り入れた。また、いくつかあるレポートのタイプの中から、この授業では、あるテーマについて自分で問題提起し、議論を展開するタイプの意見文レポートを最終的に書くことを目標に設定した。授業活動の中で使用する具体例やモデルは、市販の教材から抜粋したもの<sup>5)</sup>や教員が収集した用例、実際に学生が産出した文やレポートの一部なども使用した。

このような意図に基づいて、シラバスの全体の流れを次のように設定した。コースの前半は主にわかりやすい／正確な文章を書くためのポイントについて学び、後半は、レポート作成上必要なパーツをスモール・ステップで取り扱い、最終的にはレポートを作成することをめざす。

①自分の「書き方」の何が問題か、気づく。

②わかりやすく、正確な文章を書くためのポイント習得。

- ・表記（句読点、文字や記号使い方、漢字・カタカナなど表記上の留意点）
- ・文体（文章の種類と文体について理解する。文末表現だけでなく、接続詞、副詞など語彙すべてにおいて文章の種類によって全体的なモードチェンジが必要なことの理解）
- ・文章をわかりにくくする要素（長すぎる連体修飾・連用修飾、主語と述語の対応の乱れ）段落、中心文と支持文、段落を構成することの意識化

③レポートの書き方について

- ・論理性と客観性
- ・データや資料を使うということ
- ・問いの立て方
- ・レポートの構成、序論に必要な要素、序論と結論の関係
- ・資料・データの引用の仕方、引用・参考文献の書き方

④最終レポート

---

5) 石井一成（2011）『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社  
 佐々木瑞枝、細井和代、藤尾喜代子（2006）『大学で学ぶための日本語ライティング』The Japan Times  
 アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2001）『大学・大学院留学生の日本語②作文編』アルク  
 鎌田美千子、仁科浩美（2014）『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』スリーエーネットワーク

### 3. 教室活動について

まず、第1回目の文章表現の授業では、文章を書く際の留意点等の示唆を一切与えず、学生に今の自分の「書き方」で短いレポートを書いてもらう。今年度は朝日新聞の「天声人語」から、その時に社会で話題になっている内容の記事を4種類配布し、その中から1つ選択し、その問題についての自分の意見を書くという課題を与えた。学生の取り組み方を観察すると、全員が論点、結論、構成を考慮することなく、いきなりレポート用紙に書き始める。そして、時間がくるまで、「次に何を書こうか」考えながら書き、そして書きながら考える、という作業を続ける。その結果、パラグラフも何もなただ書き連ねられた文章が出てくる。次の時間にはそれに少し手を加え、構成しなおしたものと比較してもらう。そのことによって、今の自分の書き方をどう変えれば「レポート」が書けるようになるのか、なぜ書きにくかったのか、ライティングには留意すべきポイントと形式があることに気づいてもらい、学習目的と学習の動機を明確化する。

そして、わかりやすく、正確な文章を書くために留意すべき点を表記、文体、わかりにくい文章の要因、段落の構成の仕方、複数の段落の構成の仕方、と段階を踏んで学習する。

後半は、レポートの作成に向けて上記③について、具体例（模範例・誤用例）を示しながら、レポートを構成する各パーツについて練習を積み上げていく。

自分が書いたものについては「推敲シート」を使用し、提出前に語・文レベルから構成レベル（論理のねじれがないか）まで確認する作業や、学生同士のを交換して推敲する活動を随時行った。

これらの活動においては、実際に学生が作成したレポートの誤用を使用したり、ディベートの手法を取り入れた「一人ディベート」を行ったりした。テーマについて発想が広がらず、論点を見つけられない学生や、根拠や異なる視点からの観点を想像することに慣れていない学生が多いため、マッピングの手法を取り入れてブレンストーミングを行い、出てきた発想を一人一人が自分なりの選択と構成で文章に落とし込んでいく作業なども行った。

### 4. 最終レポート作成について

今年度の最終レポートは以下の4つのテーマから一つ選び、レポートを作成することとした。テーマとして示されたものからどのように問いを立てるか、が大事であることは、15回の授業の中で繰り返し提起されており、学生は自分が展開する議論にふさわしい「タイトル」を付けることを要求されている。「インターンシップに行くことで企業への就職率は上がるのか」「文化庁を京都へ移転させる必要はあるのか」などの「タイトル」に、自分のテーマにたいする問題意識、論点を落とし込み「タイトル」を作成する。自由テーマは学生が自分でテーマを選ぶものだが、今回は、「宝塚歌劇団はなぜ人々を魅了するのか」「いじめをなくすためにはどうしたらよいのか」の2点だけであった。

A：文化庁の京都移転

B：大学生活と就職活動

C：東京オリンピック

D：自由テーマ

レポート課題を提示する際には、以下の評価の観点11項目も示している。この評価の観点は15回の授業の中で取り扱ってきたスモール・ステップを網羅するものである。

①レポートに適した表現の使用

②誤字・脱字・わかりにくい文・誤った文

③適切な引用がされているかどうか（新聞記事や白書なども引用可。インターネットの記事を資料として引用する場合は、一個人がブログなどで自分の意見を述べているものに関しては使用不可。）

④段落が意識されているか。

⑤各段落は中心文と支持文で構成されているか

⑥序論・本論・結論の構成

⑦序論の構成（必要なことはすべて含まれているか）

⑧参考文献がきちんと書かれているかどうか

⑨自分の視点・観点で問いがきちんと立てられており、それに対する自分の答え・意見が述べられているかど

うか

⑩自分の意見をサポートする根拠が具体的に説明されているかどうか

⑪意見をサポートする根拠は客観的で、納得できるものかどうか

さらに、学生は完成したレポートに、「提出前自己チェック」を添付して提出する。チェック表は上記の評価の観点をさらに細分化した15項目からなり、「形式について」「日本語について」「内容・構成について」の3つのカテゴリーに分けられている。

## 5. まとめ

15回の授業をとおして、コースの当初に設定した5つのゴールに到達するよう様々なアプローチを取り入れてきた。学生には、文章を書く・レポートを書くことに取り組む際にどのような順番で、何に気を付けなければならないかが、ある程度意識化されたと考えられる。また、1回目の授業で「書くこと」に苦しんだ自分が、少しは「書けるように」なったという実感も得られたのではないだろうか。

しかし、課題も残っている。学生には「書く」作業をする前の「思考を耕す」過程が非常に大事であることと、そのために、このコースでは「書く」活動だけでなく、「議論する」活動もあり、自分や他の人が書いたものを推敲、評価することも大切な過程であることを強調してきた。「書く」ことは、自分との対話であると同時に、他者との対話である。そのため、「書く」ことを学ぶ授業であるが一人で黙々と「書く」作業は、授業中はほとんどない。その「書く」前段階の活動には、自由に意見を出し、お互いに推敲し、評価し合うためのクラスの受容的な雰囲気が大変重要であるが、成功するクラスとそうでないクラスがある。有効なアプローチの選択については、まだまだ分析が足りない。

また、卒業研究までを考慮に入れると、学科の性質上、学生の取り組みたいテーマは広範多岐にわたる。そしてテーマだけでなく、学生が進む分野により、言語データを収集して分析するタイプのもの、文学作品を分析するもの、社会事象を取り扱うものなどレポートのタイプも変わってくる。「日本語の文章表現」は2年生前期の科目であることから、一般的な「意見文」のスキルを中心に据え、取り組む課題も一般的で身近なテーマにとどめているが、各学生が将来取り組むテーマに近接した課題、必要なレポートのスキルの分析がさらに必要であろう。

## B クラス (担当者：藪崎淳子)

レポートを書く手順と、ルールやマナーを学ぶことを目標とする。授業時には共通のテーマで、先行研究を探して参考文献リストを作成したり、レポートの目次を考えたりなど、レポート作成に必要な手順を説明し、それによって具体的な執筆方法を段階的に学習する。そして、課題ではテーマを学生それぞれが興味・関心のあることに置き換え、レポートのパーツを作成していく。課題として提出されたものにコメントを付して返却し、学生はコメントを参考に課題を修正したパーツを組み立て、期末レポートとしてまとめる。

具体的な手順は以下の通りである。

### 1. レポートに必要な情報

「なぜ『アナと雪の女王』がヒットしたのか」や「ブラックバイトについて」といったテーマを与えて、小レポートを書くよう指示する。多くの学生は、用紙のサイズや書字方向などを教員に確認せずに作成を始めるので、あらかじめこれらを確認してから書くように伝える。作成後は、学生の所属や学籍番号、氏名、授業名などの書き忘れがないか、参考にしたサイトを文献リストにあげているかを確認する。そして、書き忘れた項目を加筆させることで、レポートを書く際の注意点を学習する。

### 2. レポートのテーマ

自由にテーマを設定してレポートを書く際に、どのような内容がレポートにふさわしいのかを、いわゆる感想文などと比較して考えさせる。その後、各自の興味・関心に基づいて、レポート作成が可能となりそうなテーマを考えさせ、3つ程度の候補をあげさせる。

### 3. 参考文献リストの作成方法

書籍、論文、電子文書など、文献に応じたリストの作成方法を学ぶ。また、実際の参考文献リストを見せ、リストにあげられた参考文献の探し方についても指導する。その後、各自のテーマについて、参考になりそうな書籍や論文のリストを作成させる。なお、このリストにあげる文献については、学内の図書館に所蔵されているも

の、あるいはネットで閲覧可能なものなど、できるだけすぐ手にとれるものにするようアドバイスをする。そして、3週間ほどかけてそれらを読み進め、テーマを絞るよう指示する。

#### 4. 引用の仕方

参考文献からの引用の仕方を学ぶ。本文中での参考文献の示し方の他、長さに応じた引用の仕方を考えさせる。

#### 5. レポートの構成

「はじめに」から「おわりに」に至る、レポートを構成する各パーツにおいて、それぞれどのようなことを書くべきかを学ぶ。その上で、章と節の差を学習し、構成を考えた適切な目次を作成するよう指導する。

#### 6. 調査方法

問題点を明らかにするために適当な調査とはどのようなものか。目的に合致する調査方法や、客観的な調査基準とは何かを、共通のテーマをもとに学習する。また、調査期間等に応じた、実現可能な調査方法についても考えさせる。

#### 7. 先行研究の紹介

先行研究の要旨を紹介すると同時に、問題点を指摘して、テーマを絞り込む方法を学習する。また、先行研究の要約と、先行研究の問題点を指摘する方法について、それぞれの良い例・悪い例を見せ、先行研究をどのように紹介すべきかを考えさせる。そして、課題では3週間ほどかけて読んだ先行研究の要旨と問題点を書かせ、期末レポートのテーマを絞り込ませる。

#### 8. 調査方法の紹介

問題解決のために考えた調査の方法について、レポートでどのように説明すべきかを学習する。調査方法を単に説明するだけではなく、調査の目的、調査対象の紹介、調査対象が目的達成のために妥当であることの説明も必要であることを、良い例・悪い例を見せて考えさせる。課題として、各自の問題解決のための調査方法を考えさせ、その概要を書かせる。アンケート調査の実施を考える学生には、アンケート用紙も作成させる。

#### 9. 「はじめに」の書き方とタイトルのつけ方

「はじめに」には、研究の目的である問題提起と、レポートの構成の説明、結論を書く必要があることを説明する。そして、レポートの冒頭にあっても、執筆順序はたいてい後になることを実感させる。その上で、各自のテーマについて、これまで課題で作成してきたレポートをもとに、「はじめに」を執筆する。また、タイトルのつけ方を、良い例・悪い例を見せて考えさせる。

#### 10. わかりやすい文章

主述がねじれた文や読点のない文、語句の重複した文など、わかりにくい文を推敲させ、レポートを推敲する際に留意すべきポイントを学習する。そして、課題として作成してきた各レポートを組み合わせ、推敲・校正作業をする。

学生が書くレポートのテーマは、「やさしい日本語とは何か」「源氏物語における色の役割」「スターバックスにおけるホスピタリティ」など多岐にわたる。実際に調査・考察をさせ、結論を書かせることに重点をおくのではなく、どのようにして自らが抱く疑問を解き明かすか、その調査方法を説明するところに重点をおいて期末レポートとしてまとめさせる。本来のレポートや卒業論文のような完結した一本をまとめあげるには至らないが、先行研究を読んで自ら問題を絞り込み、その問題解決の方法を探るという手順を体験することは、他の授業のレポートや卒業論文の執筆に役立つものと考えられる。

上に示した手順通りに順調に作業が進む学生は稀ではある。多くの学生が、先行研究によって当初考えていた問題が解決されてしまい、問題設定の段階からやり直したり、問題が絞り切れていないために調査方法を考える段になってつまずき、先行研究を読み直したりと、行きつ戻りつしながら作業を進める。しかし、それを経験することこそ意味がある。課題に対する教師のコメントについてさらなる説明を求めたり、テーマについて相談に来たり、中には提出前のレポートの最終チェックを求めたりする学生もおり、レポートの完成度を高めようとする姿勢がうかがわれる。

## C クラス（担当者：西田隆政）

### 1. 概要

2年C組では、「日本語の文章表現」を受講することで、今後の日本語日本文化学科での専門科目のレポート作成、さらには、卒業研究の執筆のために、論理的な文章を書けるようになることを、目標とした授業を展開してきた。その中で、大きく3つの柱を考えている。

- ①題材をいかにテーマとして設定するのか
- ②基本となる文章の構造を踏まえていかに文章を書くのか
- ③文法や用語や引用法等の基本ルールをいかに習得するのか

以下、この項目ごとに取り組みの要点を説明する。

### 2. テーマの設定法

レポートや論文の題材が提示されたり、自ら探してきた際に、それをいかにレポートや論文のテーマとして、設定するのかというのが、最初に注意すべき点である。具体的に、方言という題が出されたときにはどうするのか、ということから、考える課題も行った。

方言と言われても、日本語には各地それぞれの方言がある。その漠然とした題から、いかに、自分の興味に合っ、なおかつ、レポートや論文のレベルで解決できるテーマを設定する必要がある。たとえば、自分は兵庫県姫路市の出身で播州方言に興味があるとす。これで地域は決まる。しかし、そうしても、音声、文法、語彙、コミュニケーション等、様々な検討の対象がある。

この段階で、敬語について検討したいという学生がいた。その学生は、「てや」敬語に興味を持っているとのことであった。そこで、「てや」敬語の使用法、さらには共通語の「れる・られる」敬語、近畿で広く行われる「はる」敬語等にも、視野を広げて、自分自身や周辺で、どのように「てや」敬語が使用されているのか、というのを、その学生は検討することになった。

このように、検討対象となる題材をいかにテーマ化するのは、文章を書く上での最初の作業である。しかし、意外と、この点を曖昧なまま文章作成を進める学生も多く、テーマ設定の重要性は、2年生の段階で自覚させる必要がある。

### 3. 文章の構造

論理的文章にも、様々な文章構成のタイプがある。しかし、この授業では、もっとも簡単な形から習得することとしている。いわゆる、序論・本論・結論という三部構成である。

序論では、先にも触れたテーマの設定から問題点の指摘までを書く。本論では、問題点の解明のためにどのような検討を行ったかを書く。結論では、具体的にその成果をあげていく。

愚直な書き方であるものの、論理的な文章を書きなれていない学生たちには、このようなわかりやすい形で理解させるのが、もっとも効率的であると考えている。

先の「播州方言の敬語」のテーマでは、序論では、自分の日常生活で使用する「はる」敬語をテーマとして、その問題点として、他の共通語の敬語等との使い分けをどのようにしているのかを考えることを述べる。本論では、検討方法として自分自身の親族を調査対象者（インフォーマント）として、高年層・中年層・若年層のそれぞれにインタビューを実施して、その使用方法を取材して、各年齢層での使用の共通点と相違点を指摘する。そして、最後の結論では、そこから得られた成果の意義を記述してまとめている。

このように、愚直ではあるものの、形を踏まえれば、必ず完成へとつなげることができることを指摘して、論理的な文章は、文章全体の構造を意識して、執筆すれば十分に可能なものとなることを実感させるようにしている。

### 4. 基本ルールの習得

この点については、各学生による個人差が非常に大きいということを注意しておく必要がある。高等学校の段階で指導を受けている学生であれば、再確認する程度で、すぐに大学レベルの文章表現力の習得へとつなげることができるが、その点の不十分な学生に対しては、別途の指導が不可欠である。

文法については、主語と述語の対応、係り受けの明確な対応、接続詞の適切な使用等の重要性を指摘して、そこから、長文を書くのではなく、短文を積み重ねて文章を書くことが論理的な文章執筆の基本であることを理解さ



せる。

引用のルールについては、指導を受けている学生とそうでない学生の差異が大きい点を留意して、必要な点を指導する。特に、出典となる文献や、インターネット上のサイトについては、引用の際の最低限の踏まえるべき点を確認している。

このように、常識的なものであるが、基本ルールを習得することなしには、論理的な文章として、公に出せるものは作成できなことを実感させるようにしている。

#### 5. まとめとして

上記のような基本的な方法を身につけるためには、実際に書くしか方法がない。そこで、授業においては、毎回何らかの課題を設定して、短い文章を書かせたり、次の授業までの課題として、何らかの文章を書いていくことを実践させている。

基本の方針は、毎年大きく変更することはないが、担当する学生のレベルや興味は、開講年度によって相違し、毎回工夫が要求される。これらの点を踏まえて、授業内容の向上を図っている次第である。

#### D クラス（担当者：信時哲郎）

この授業が必修科目となり、事実上の2年生ゼミとなってから数年が経過したが、①授業時間中に小テストを実施するようになったこと、②ゼミ選び期間に重なるようになったこと、という変化が授業の運営上、大きな問題となったように思っている。

①については、90分の授業が、実質70分ほどに短縮されたことを意味する。したがって学生への説明や実践の時間は短くなり、授業内に終わるものと思って課題を設定しても、時間内にやり終えることのできない学生が増えることになった。その結果として宿題が増えたり、あるいは簡単な課題を出さざるを得なくなっている。

小テストは一般常識の問題集を單元ごとに学習させた結果を見るものだが、こうしたものはただ問題集を配っただけでは、よほど意識の高い学生でなくては手を付けることはなく、全学生に強制的にするといったものでないと徹底できない。

それでは、なぜ小テストが必要かということになるが、第一には一般常識を復習させるリメディアル教育の側面と就職試験への対策であるが、第二の理由としては、大学に入学して以来、ほとんど自宅での学習時間がなく、アルバイトのみで学生生活を終わってしまうような者も多い中で、なんとか自主的に勉強させる時間を確保しておく必要を感じたからである（日文では1年の基礎ゼミから3年ゼミまで、各時間に小テストを実施している）。学力が不足しているというより、むしろ学習経験自体が少ないというのが、本学の学生を見て感じることだが、そうした状況に対する打開策の一つとして行っている。

また、小テストを採点して、翌週にそれを返却するというのみでなく、テストの端に「この1週間で振り返って、ほめられる自分、反省すべき自分、大学生活で困った点などを記入。」という欄を設けて学生たちに書かせ、教員は必ずこのことについてコメントを付けて返却するようにしている。学習、進路、生活一般についての感想やトラブルの報告、質問や相談など、内容は多岐にわたるが、教員と学生の手書きによるコミュニケーションは、ことによると小テストの実施以上に意味があるものかもしれない。

以上の点から、デメリットはあるものの、「日本語の文章表現」の課題自体を考え直す必要があると思われる。

②については、1点目ほどに明確な影響ではないが、最終課題としている「自分の興味をもった分野について的小論文」を書かせる過程で得た知識やノウハウを、ゼミ選択自体と絡ませることができなくなったことである。

従来、ゼミは3・4年生のみの必修であったが、2年後期からゼミを開始するカリキュラムに改変したのは、日文が他の学科とちがって学科オリジナルの経験を持たせにくいという反省からである。文学部のみで比較しても、英文ならば4年間を通じて、英検などの検定試験へのチャレンジや海外留学、シェイクスピア祭への参加というように自分が努力したこととその成果がわかりやすく、学科としてのアイデンティティを自覚しやすい。多文化コミュニケーション学科でも、語学力や留学、その他、数多のボランティアやアクティビティーが授業やゼミと連動しており、学ぶ内容・目的が明確で、得たものについても実感しやすい。メディア表現学科でも、多くの実習科目があり、メディア祭などの成果発表の機会にも恵まれているので、やはり学んだ内容が実感しやすい。転じて、日文では文学・国語／日本語学、ホスピタリティ、コミュニケーションと方向性もさまざま、学科全体で

検定試験への合格や留学に力を入れるのも難しいし、学科統一の企画や成果発表会も考えにくい。そこで、ゼミで学んだこと、同じ時間を過ごした友人たちとのつながりを一層強化させる以外に方策がないのではないかという結論に至り、2年後期からゼミを開講することになった。

しかし、ようやく専門的な授業が始まった2年の前期半ばでゼミ選択を迫ることは、せっかく芽生え始めた学生の可能性を封じ込める場合もあり、ベストなものとは言えない。「日本語の文章表現」におけるレポート作成の実践も、自分自身の方向性を決めるための重要な機会であったと思うが、これも中途半端なものになりがちだ。もちろん、対策も考えており、1年後期から受講できる専門科目数を増やすなどの措置を取り、できるだけ戸惑いがないように、ミスマッチが起こらないように考えてはいる。しかし100%の改善ができたとは言えないのが実情である。

以上のように「日本語の文章表現」は方向変換を求められていたのだが、試行錯誤のただなかにもありながらも、近年、あくまで自分の担当クラスにおいての話ではあるが、およそ4つの文章表現課題を出し、添削やコメントをつけて返却するというのをやるようになった。4つの課題と、その概要、教育的な効果について書いてみたい。

最初に出す課題は「自分の好きなものについて」。文字数は特に決めないが、起承転結という約束で書かせることが多い。好きなものについて、というテーマにしたのは、文章表現という面倒な科目を受講することとなった最初に、本人が楽しんで書けるような素材がいいのではないかと思ったためである。

また、起承転結についてだが、これだけが文章表現上の唯一絶対の鉄則であるというつもりはない。しかし、文章を書くこと自体には、苦手意識を持つ者の少ない日文学科の学生であっても、あらかじめ自分が何を書きたいかをよく考え、どういう順序で、どれくらいの文字数を割くことが効果的なのか、について全く考えていない学生も少なくないからである。そのために少し窮屈な設定を作って、考えてから書くということを身につけさせたいという思いからである。

まず課題について説明し、実作をさせるが、なかなか書き始めない。パソコンが使える教室で授業を行っていることから、カチャカチャと音だけさせていながら、よく見るとなやらを検索をしていたり、隣同士の席、前と後の席同士で話をしている者もある。それらの全てが課題に対する情報収集や情報交換であったかはわからないにせよ、そうした環境の中で課題に取り組むということが大学という場所のよい面でもあると思っているため、特に咎めることはしていない。数分すると話し声は消え、パソコンのカチャカチャする音は一層高くなってくるが、それは、個々に文章をワープロで書き出しているための音で、もうすでにグーグル等の検索もおしゃべりもしている者はいない。

時間が終わったところで提出できるものは、半分を少し上回る程度か。授業が終わってから2日ほどにメ切を設定し、添付ファイルで作文を送らせるのが通例となっている。よくできたものについては、次の時間に氏名を公表せずに読み上げることにしている。

次いで課題にしているのは、「データを読み解いて気がついたことを文章にする」というものである。学生が新聞を手取る機会は、近年、ほとんどないように感じる。しかし、スマホやSNSの普及によって、ニュースに触れる機会は増え、学生から情報を得ることも多くなっているように感じる。

ただし、ネット社会の落とし穴は、自分が日ごろから注目しているジャンルのニュースに関しては驚くほど敏感で、正確な知識を得ている一方、少し方向が異なったり、複雑な問題になると全く知らないままでも多いことだ。芸能ネタや流行について、猟奇的な殺人事件の情報などには詳しくても、日銀が国債の買入れ額を増やしていることがいったいどういう影響をもたらすのか、などという話になると、全く対応できない。

また、表やグラフの読み方を練習する段階で、右軸と左軸で単位が違っているグラフなどについて質問すると、見事にこのトリックに引っかかってくれたりする。情報の発信者が、いかなる意図をもって発信しているのかについても、性善説に則りすぎて、例えばコンビニエンスストアの現状について考える際、コンビニ会社のホームページの情報だけを見て事足りりとしているようなことがある。

今年度は、「非正規雇用者比率の推移（男女年齢別）」「女性の年齢階級別労働力率の推移」「女性の年齢階級別労働力率（国際比率）」「年齢別未婚率の推移」の4つのグラフをあげ、感じたことを述べよというもの。統計学的には即断できないロジックを用いていること、独創的にすぎる見解を示す学生もいるが、おおよその傾向、そ

の理由について、自分なりに考えて書いたものであればよいと思っている。

授業である限り、成績評価はつきものだが、この段階では特に優れたものもないかわりに、特に劣ったものもないように思う。ただ、ふだんからグラフやデータを読みなれている学生、社会の趨勢に敏感な学生の書いたものは説得力があるように思う。

3つめの課題は「自己PR文」である。これはいわゆる作文やレポートとはおよそ違ったタイプの文章表現であると思うが、学生生活を送るうえで、身に着けていなければいけない文章である。

実際のエントリーシートをダウンロードしてコピーし、書き込ませる形式で授業を進めている。

最初の1時間は、エントリーシートのシステムについて講じ、履歴書部分の書き方についての諸注意と実践。そして、志望動機を書かるところまで行っている。

聞いたこともない会社のエントリーシートを書けと言われて戸惑う学生は多いが、エントリーシートは平均して50社程度に出すものであり、自分が現段階で知っている会社がいかに少ないのかを知らせることで、学生たちは自分の立場を理解する。

まず、会社のホームページに書かれていることを読ませるが、情報はそれで充分。会社の目指す方向性と自分自身の方向性が合致している点を探し、その点をアピールして作文をするように言い聞かせる。すると、初めての経験ながら、学生たちは時間内に提出でき、内容もほぼ問題ないものにまで仕上げる事ができている。どうしても、うわすべりな文章になりがちだが、ここで妙な個性をアピールしてしまっても仕方がないのが日本の就職活動である。ホームページ上の情報から、いかにもそれらしく自分の感想や視点を交えて書く文章には慣れているのだろう。

2時間目に、たっぷり時間をかけて書かせるのが自己PRである。自分の長所をダラダラと書けば嫌味になるし、短所ばかりを書いたら、誰も採用してくれないと思われるようなものになってしまう。放っておくと、学生たちは、自分がいかに社会性のないダメな人間なのかということについて延々と書くことになるが、そこをどのように自分を嫌味ではないようにアピールするかについて講じている。

学生たちに勧めているのは、まず自分の失敗談をさせて、そこからいかに努力を重ねて這い上がってきたのか、そこで何を身に着けたかを書かせるパターンの文章である。

学生の席を巡回しながら、アピールすべきこと、すべきでないこと、過去の学生の例、会社の例などを説明しながらたっぷり時間をかけるが、それでも時間内に提出できるものはほとんどいない。こればかりは自分自身のことを掘り下げて書かなければならず、面接等でもつっこんだ質問をされることのできちゃんと書かないわけにいかないからだ。志望動機と違って、うわべだけのことを書こうにも、所属している学科や学んでいる内容、自分自身の能力や資格等々と齟齬があってもいけない。

注意すべきこととして、「抽象的なことばかりを書くのではなく、具体的なエピソードを書くこと」「小中高時代のことばかりを書くのは厳禁（継続してやっていることなら可）」「誰にとってもスゴイこと（〇〇大会に優勝など）を探する必要はなく、小さなことでもいいのでしっかりと書くこと」などをパワーポイントで説明し、配布資料にメモさせながら、個々に自分自身が進歩できたというエピソードを探させ、それを社会での活躍に結びつけられないかを考えさせている。

学生にはコメントをつけて返却しているが、何度か書き改めているうちに、たいていの学生はエントリーシートを書けるようになる。もっともエントリーシートがしっかり書けたところで、選考には試験や面接、グループディスカッションが控えており、就活対策が万全であるというわけでもない。しかし、自分を見直す機会として、他者に自分をどう伝えるか、他者が自分をどう見るかについて考えさせる機会として、自己PRを書かせることに意味がないとは思わない。友人へのメール、授業中のレポートとも違うタイプの文章、自分の人生がかかった文章を書かせることは、近年の大学生にとって大きな課題であり、社会人への階段であるとも言える。就職向けの文章を書かせることなどともんでもないと思う教員もいるかもしれないが、学生がこれほど真剣に取り組む課題もない。

最後の課題は、「自分の気になる問題について、自分でデータを集め、論理を組み立てながら結論に導く」という作業。すなわち「論文を書く」という課題である。

私の授業では、パワーポイントにて発表内容をまとめ、全員の前でプレゼンテーションをさせ、教員や学生か

らの質疑応答やコメントに応えること。そして、その質疑応答などの結果をふまえてレポート提出をすることを最終課題としている。

学生たちには、次のような説明を、プリントに基づいて行っている。内容は、時事ネタ、前年度の卒論内容などを取り込み、できるだけ新しい内容のものにすることを心がけている。

レポートとはホームページや辞書・図鑑から必要箇所をコピーしてきたものではありません！  
さまざまな情報ソースから集めてきた資料・データを分析して、自分の意見や主張を書いたものです。

学生たちが普段書いているレポートは、授業ノートを wikipedia をはじめとするネット情報で新しい要素を加えながらまとめたものが多い。小中学校における「調べ学習」である。しかし、既にわかっていることを改めて書く必要はないし、それに論文という名前を冠して表することは許されないのだ、と説明する。誰もが聞いたこともないような発見や発明を書いたものでなければオリジナルの名に値しない。また、自分や友人だけの間で通用することではなく、どこの世界に言っても堂々と話ができるような内容で、データや論理を使って相手を説得する必要があるのだと付け加える。

wikipedia をはじめとするネット上のデータを敵視する大学教員もいるが、鵜呑みにするのが危険であるのは当然だが、現代文化についての情報量の多さ、早さはいかなる印刷媒体の比ではないし、いわゆる大出版社・大新聞社の提供する情報が信用に足るものなのかどうかもきわめて疑わしい。『世界価値観調査』によれば、日本人の7割ほどが新聞や放送局の情報を信じられるものだと思っているようだが、アメリカでは信頼に足りないとするものが8割程度。2016年度の「報道の自由度ランキング」では、日本は72位。教員自身の古い信仰を捨てるべきだと思う。

閑話休題。そして、テーマを大きくしすぎないことについても注意する。例として、次のようなものを示す。

日本マンガの歴史>戦後マンガ史>戦後野球マンガ史  
>野球マンガに登場する少女たち

卒業論文で、あるいは修士論文や博士論文であったとしても、「日本マンガの歴史」について、まったく新しい視点で書き直すことはほぼ不可能だ。「戦後野球マンガ史」くらいで、ようやく博士論文のテーマになり得る大きさかもしれない。扱うのであれば、「野球マンガに登場する少女たち」というあたりが卒業論文のテーマとしては、ふさわしい大きさではないか、と話している。

ここまでは、少なくとも頭では理解してもらえているようだが、なかなかうまくいかないのが引用という概念、そのやり方についてである。これは3・4年生になっても難しいようで、なかなかうまくいかないが、難しさの理由は、国語能力によるものではなく、自分自身にとっての新しい情報が誰によって発明・発見されたものなのか、何が定説で、何が通説なのか、何が新説なのか、といったことについて判断がつかないでいることによるのではないかと思う。例えば、或る定説を論文に引用する際、自分がその存在を知ったきっかけとなった本やブログの著者名を延々と引用してしまう。このあたりは国語の授業ではなく、専門領域の知識や指導が必要なレベルで、「日本語の文章表現」といった2年生レベルの必修科目では、残念ながら対応できない。

今年度、学生たちの書いたものは、やはり長くなってしまったのでここに掲載はしないが、タイトルをあげれば次のようなものであった。「チケット転売価格からみる宝塚歌劇の人気」「少女漫画のアニメ化の20年の変化について」「『獣の奏者・完結編』刊行の賛否」「兵庫県の観光客」「エレクトリカルパレードの変化」「有川浩作品 自衛隊三部作」「2・5次元ミュージカル・舞台と漫画実写化の評価の違い」「山陰のカフェ事情」「長崎・横浜・神戸の比較」「フランスをはじめとするヨーロッパ各国と日本の労働に対する考え方」「茶道の流派」「流行語大賞」といったところである。他の授業でのレポートやテストの多い時期ながら、自分の選んだ題材だけに、例年よりも充実した内容であったように感じた。

まだまだ試行錯誤段階であることは自覚しているが、カリキュラムや学生のニーズ、キャラクターなどを考慮しながら、今後もまた進化・成長を続けていきたいと思う。

## E クラス（担当者：横濱雄二）

まず、概要について述べる。授業では、大学生としてふさわしい日本語力を涵養することを目的とし、単に表現技術の指導にとどまらず、発想や、構成、口頭発表について指導している。そのため、単元は 1「発想力を鍛える」、2「表現力を鍛える」、3「情報を集める」、4「構成力を鍛える」、5「レポートの形式を学ぶ」、6「プレゼンテーション」の6つとしている。

これらの単元を適宜分割したうえで、説明と演習課題からなる教材プリントを作成し、毎回の授業は、それに沿う形で進行している。授業の最初に本時の目標や重要事項について簡単な説明をし、次に演習課題へと移る。演習課題は各回2～3題を用意しており、1～2題は授業中に解き、その内容に基づいて補足説明を加える。演習中は教員が机間巡視して指導している。1題は家庭学習課題として持ち帰らせる。授業中に解いたものはその時間の終わりに提出させ、家庭学習課題は次週授業で要点等の補足説明を行った後で回収する。いずれも添削して返却している。

それぞれの単元について述べよう。まず、「発想力を鍛える」の単元では、トニー・ブザンによるマインドマップ法<sup>6)</sup>などを参考に、思考内容を図として可視化するマッピングを行っている。テーマとしては、自分の将来や幸せなど、自己の内面を掘り下げるものを設定している。

つぎの「表現力を鍛える」では、学生自身が作成したマップをもとに主題をしばらくこんで文章を作成する課題を出している。ここでは、拡散した思考を収束させて他者の理解を伴うように提示することが、学生に期待されている。このようにマッピングと文章作成を連続することによって、学生は思考を可視化することによって発想を広げることを学ぶとともに、文章として整理することでテーマに対しての理解の不足や視野の狭さに気づくことができる。

また、「表現力を鍛える」の単元では、客観的な描写と主観的な説明の違いについて、静物を描写する課題を用いて指導している。くわえて、発想力と表現力の双方にかかわる演習として、音楽を聴き、それをもとにストーリーを作るという課題を出している。これらにより、学生は、客観的な記述や文章の一貫性を保つことを心がけることができる。

「情報を集める」の単元では、図書館員と連携した情報検索講座を実施している。これは大学の契約データベース（各種新聞、辞書類および文献検索）を活用できるようになることを目標としたものである。そのうえで、何人かの人物をあげてその略歴と著作について調査結果のレポートをパソコン上で作成、提出する演習を行っている。これはまた、今後必要となる電子メールやオンラインストレージを利用した課題提出に習熟する機会でもある。

「構成力を鍛える」の単元では、2種類の小論文を課している。ひとつが新聞記事から意見を述べるもので、これは記事の要点を抽出して論点を設定し、それに対する自分の意見、想定される反論、反論に対する反駁を加えて、結論を出すという構成を習得するものである。もうひとつは与えられたデータを分析するもので、互いに異なる二つの要素を対比あるいは類比させ、傾向を明確にする訓練である。

この段階で、学生には期末レポート（自由テーマ）の素案を作成させる。これは提出までに2～3週間の期間を設けた家庭学習課題であり、授業の中間総括の役割を果たす。すなわち、自由テーマとして何を選ぶか（発想力を鍛える）、そのテーマについて可否の判断を含めどのように調べるか（情報を集める）、どのようなアウトラインとするか（構成力を鍛える）、素案であっても相手が理解できるか（表現力を鍛える）の諸要素を満たす必要がある。学生にはテンプレートとなるワープロソフトのファイルを配布し、期日までにメールで提出させる。添削もパソコン上で行い、記述内容が不十分の場合は、再提出を求めている。

一方、この間の授業は「レポートの形式を学ぶ」の単元を扱う。これは、大学生の作成するレポートとして必要な、タイトルや章・節立て、引用文の処理、脚注の処理、文献リストの作成について、既習分野も含めて指導するものであり、実際にワープロソフトでサンプルレポートを操作することで習得をはかっている。

「プレゼンテーション」では、期末レポートの素案に基づき、さらに調査や考察を加えた内容をもとにスライドを作成させる。学生はプレゼンテーションソフトにさほど習熟していないため、学生には自分の期末レポート課

---

6) トニー・ブザン／バリー・ブザン（2013）『新版ザ・マインドマップ』ダイヤモンド社

題に基づいたスライドを作成させ、教員は机間巡視による指導を中心としている。この間、テーマの変更や微調整もあり、教員は面会・メールの双方で随時相談に応じている。最終回の授業では、学生による口頭発表とピアビューを行う。

なお、学生の関心は幅広く、古典から現代までの日本文学や日本語はもとより、観光や旅行などのホスピタリティ、伝統的な日本文化から現代のサブカルチャーにいたるまで、毎年さまざまなテーマで口頭発表がなされている。学生の反応は素直であり、調査や考察の行き届いた発表には賛辞が寄せられ、活発な質疑がなされる。

授業終了後2週間をめどとして期限を設け、期末レポートを提出させる。「構成を鍛える」の単元で出題した素案と「プレゼンテーション」の単元での調査や考察、さらには発表時の質疑内容をふまえて、学生はレポートを作成する。この段階に至ると、ほぼすべての学生が形式、内容ともに一定水準に達したレポートを提出している。

このように、本授業は、具体的には大学生活で必要とするレポートとプレゼンテーションの技能を習得させるという流れのなかで、発想力、表現力、構成力といった日本語力を涵養するものである。

## F クラス（担当者：米田明美）

1. Fクラスのシラバスについては以下のとおりである。

- ①文章とは一文の構造
- ②句読点・段落をつける
- ③古文を読んでみる
- ④ことばと語彙（1）
- ⑤ことばと語彙（2）
- ⑥文章の要約
- ⑦新聞記事にリードや見出しをつける
- ⑧文章を書く（1）
- ⑨文章を書く（2）
- ⑩相互評価

2. ①文章とは一文の構造

そもそも「文・文章とは何か」から入り、日本語の文章の基本構成を理解させる。英語・中国語などと比較し、日本語は膠着語であることを理解させる。その上で助詞・助動詞がいかに重要であるか、加えて修飾語・被修飾語をどのように並べるとよいかなど悪文を提示し、「伝わりやすい文」作成を学ぶ。

3. ②句読点・段落をつける

句読点のつけ方を、いくつかの例文を示し考えさせる。加えて、段落の意を示し、新聞記事（「天声人語」「春秋」など）の句読点・段落を省略した文章を示し、各文章に句読点・段落を付けさせる。のちに新聞記事を示し、自らつけた文章と比較し理解させる。

4. ③古文を読んでみる

②を確認させた上で、高校の教科書に掲載されている名文（「徒然草」「方丈記」「枕草子」などを音読させる。その後、教科書に掲載されない箇所の文章を示し、辞書を利用し意味を理解させながら、各自で句読点・段落を付させ音読させる。

5. ④⑤ことばと語彙（1）（2）（グループ活動）

女性雑誌の文章特集に掲載されている、ことば（慣用句・諺・熟語・熟字訓など）の誤用例をあげ、小テストの形式で行う。その後グループ内で辞書を用い解答させる。お互いの国語力を認識し、刺激になるようである。

6. ⑥文章の要約

新聞記事・論説文・小説（短編）・エッセーなど、多種の文章を読み、要旨を提示させる。文章の内容に応じて、200字・300字・400字と決め、その範囲内で要約させる。場合によっては、2人・3人などで協力して行わせる。

7. ⑦新聞記事にリードや見出しをつける

6の延長戦上となる作業であるが、新聞記事の基本的な構造を説明する。次に記事の内容を段落ごとに記者の

伝えたいメインメッセージを提示させ、リードや見出しなどを付けさせる。記事によっては、難解語句の説明をまとめさせる。

#### 8. ⑧⑨文章を書く (1) (2)

今までの総まとめとして、「人に読ませる文章」を書かせ、全員の文章を掲載する「文集」を作成する。テーマはその学年によって多少異なるが、「今の私を振り返って」「今までの人生最高の至福の時」「頑張った自分」など、将来に繋がる内容にする。その際構成を考えさせ、主張と段落、書き出しとまとめに留意させながら、「下書き(創作メモ)→推敲→清書→見直し」の手順を理解させる。

#### 9. ⑩相互評価

8・9でまとめた文集(全員ペンネーム)を読み、全員が全員の感想評価文を書き、各々に返却する。その後各自寄せられた感想評価文を読み、それに対しての感想文をまとめる。

### IV. 今後の課題

A～Fクラスの取り組みを振り返ると、それぞれの教員が様々なアプローチを取り入れ、試行錯誤を続けてきたことがわかる。統一の教材を使用していないにも関わらず、シラバスを緩やかに共有し、共通のコースの到達目標を持っているため、どのクラスの学生も基礎的ライティング・スキルの習得は、確保されている。今後の課題として言えることは、学科という視野で見た場合は、限られた時間の中でできるだけ多くの実践的な「書く」ことの練習を確保するための工夫であり、日本語日本文化学科の学生たちが取り組みやすい「書く」テーマを選択することであろう。そして、卒業研究に取り組むための基礎的なスキルの習得を目指すものであることを再確認し、コース・デザインを再検証する必要がある。また、大学全体のカリキュラムという視野で見た場合は、ライティング・スキル習得を目的とした科目が複数ある中で、学生が重複なく様々なライティング・スキルを磨く経験ができる機会を得られるよう、「日本語の文章表現」科目が果たす役割を明確化することであろう。

#### 参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著(2001)『大学・大学院留学生の日本語②作文編』アルク  
安部朋世／福嶋健伸／橋本修編著(2010)『大学生のための日本語表現トレーニング ドリル編』三省堂  
石井一成(2011)『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社  
鎌田美千子、仁科浩美(2014)『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』スリーエーネットワーク  
佐々木瑞枝、細井和代、藤尾喜代子(2006)『大学で学ぶための日本語ライティング』The Japan Times  
佐渡島紗織／太田裕子編(2013)『文章チュータリングの理念と実践』ひつじ書房  
清水良典(2003)『自分づくりの文章術』筑摩書房  
トニー・ブザン／バリー・ブザン(2013)『新版ザ・マインドマップ』ダイヤモンド社  
松本茂、河野哲也(2007)『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』玉川大学出版部  
山田剛史、林創(2011)『大学生のためのリサーチリテラシー入門 研究のための8つの力』ミネルヴァ書房